

作動グループと基底的想定グループ
に対する「特殊作動グループ」の
媒介機能に関する実験的研究

井 上 操

Misao INOUE

要 約

本研究は Wilfred Bion の集団理論に基づく実験的研究であり、その理論の中でも「特殊作動グループ」という概念に焦点を当て、「特殊作動グループ」がグループにおいてどういう機能を果たすのかについての臨床的な仮説を、実験的に検証する事を目的としている。

この概念に基づき、特殊作動グループのいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうという仮説をたて、ランダムに抽出した学生122名の被験者を、1グループ6人の計25グループで構成し、その内14グループ(男=8、女=6)にはサクラ2人を入れて実験室実験を行った。そして、本研究の仮説を統計的方法を用いて検証していった結果、仮説は検証された。

問 題

集団理論はレヴィン(Lewin,K.)を始め、多くの学者達によって研究されてきており、その中でも、グループの効果性についての研究も多くなされている。例えば Bales の理論もその一例である。Bales の言う第一の側面は、課題関係あるいは「道具的」行動(instrumental behavior)と社会情緒的あるいは「表出的」行動(socio-emotional or expressive behavior)の区別である(R.ブラウン.,1993.,p,38)。つまり、作業を意識した行動と感情的行動は別である、ということである。そして第二の側面は、集団は平衡へ向かう自然の傾向を持っているという仮説である(Bales,1953)。さらにどんな行為も反作用を作り出すのである(R.ブラウン.,1993.,p,39)。つまり、作業を意識した行動と感情的行動をバランスを保ってできるということである。

以上は Bales の基本的な考えであるが、本研究と最も関わりの深い Bion も集団理論研究者の一人である。

今回の研究では、Wilfred Bion の集団理論に基づいているため、本研

究の仮説を述べる前に簡単に Bion の基本的な概念について述べてみよう。

Bion の基本的な概念

Bion (1961)によれば、グループには二つの機能があるという。それは、「作動グループ」(work group)として機能するか、「基底的理想グループ」(basic assumption group)として機能するかである。「作動グループ」として機能する場合、本質、大きさ、構成、構造、目的に関わらず、あらゆるグループにはメンバー達がそのために集まった基本的な作業(basic task)があるという。その作業が遂行されるためには、メンバー達がそれぞれの能力に応じた協力、或いは「協同」(cooperation)が不可欠になる。しかし、グループ活動へ参加出来るためには、幾年もの習練、経験が必要である(Hafsi,2000;井上,2000)。さらに、作業に従事するグループに不可欠なもう一つの特徴は、合理的且つ、科学的方法を用いることによって、現実接触到しているということである。従って、作業の現実的な側面としての「時間」と「発達」は、グループ活動において重要な意味を持つのである。このようなグループ機能を「作動グループ」と呼ぶ。ここでの「グループ」という言葉は「ただ特殊な精神活動を包括するものであって、もっぱらそれに携わる人を意味するものではない」(Bion,1961,p.144)。

また、Bion (1961)によれば、作動グループは常に「基底的理想グループ」と共存し、そしてそれによって阻止されたり、回避されたり、時には支持されたりする場合があるという。

「基底的理想グループ」は、グループの成員に共有される目標達成のための手段或いは幻想である(Hafsi,2000;井上,2000)。Bionはこの情動状態を「依存基底的理想」、「つがい基底的理想」、「闘争／逃避基底的理想」という三つに区別している。この三つを以下に記述する。

依存基底的想定 (basic assumption of dependence)

このグループの特徴は、絶対的にある人に依存し、グループの必要とするものや欲望をその人（リーダー）によって、全部満足させられるべきであるという確信を抱くことである (Grinberg, 1977)。そのため、メンバーはグループの要求を満たしてくれるであろうリーダーを追い求める。従ってグループは、リーダーだけが全知全能であり、グループ自身は未熟で助けを必要とする無力な存在であり、色々な試みをする事を怖がり、自分一人では意志決定をする能力も無く、何も出来無い「かの様に」行動する。この想定を受けたリーダーは、最終的にメンバーの依存全てに応えられずに自滅するのである。

つがい基底的想定 (basic assumption of pairing)

Bion が用いた pairing（つがい）という言葉は誤解を招きやすいが、つがい基底的想定グループにとって重要なのは「つがい」そのものではなく、このつがいによってもたらされる幻想である。このグループは、これから新しく生まれるもの、又は未だ生まれていないリーダー（救世主）に対する希望的な期待を抱き続けることが特徴である。この期待される救世主には、不安と恐怖からグループを救うという期待がかけられている。救世主の創造は、つがいとしての（異性、或いは同姓同士の）二人のメンバーに託され、グループはこのつがいに期待をかける。グループにとっては救世主待望自体が目的であって、この目的が決して満たされてはならないのである。

闘争／逃避基底的想定 (basic assumption of fightflight)

「闘争」と「逃避」は正反対に異なる種類の反応である、と一般的には理解されているが、Bion (1961) はそれらを分離せず、同じ刺激によって引き起こされた二つの異なった行動として定義している。このグループは、

攻撃すべき或いは避けるべき敵がいるという信念を持つ(Grinberg,1977)。言い換えれば、グループのリーダーが妄想的に仕立て上げられた結果、リーダーはグループ外部又は内部に悪い対象が存在し、そのためにグループは自己防衛したり、又はそれらから逃げなければならないという観念を支持しなければならないのである。このようなグループの要求に応えることの出来ないリーダーは無視されるのである。

以上は、基底的理想の説明であったが、本研究では特に「特殊作動グループ」に焦点を当てているため、以下にその説明をしたいと思う。

特殊作動グループ(specialized work group)

Bion は集団が作動グループ活動を示すようになるためには、基底的理想活動を無力化する、すなわち集団における作動グループ機能を邪魔させないようにすることが不可欠になるということを主張している。

しかし、作動グループになることはとても辛いことであるため、作動グループになることから逃げようとする。そうすると、基底的理想グループが支配的になってしまうため、作動グループになるためには基底的理想を担当するサブグループが居るのである。そのサブグループが居ることによって、グループ内の基底的理想をある程度満たすことができ、作動グループとして活動できるのである。このようなサブグループを「特殊作動グループ」という。

「特殊作動グループ」の役割は、最低限度の基底的理想活動を維持しながら、基底的理想グループが主要な集団に於ける作動グループ機能を覆ったり、妨害したりしないように基底的理想活動を引き受けることである(Hafsi,1999 ; 井上,2000)。

このような Bion の理論に基づいて、筆者は研究を行った(井上,2000)。この研究の第一の仮説は、特殊作動グループのいるグループの方が、基底的理想機能が低くなるであろうということである。そして第二の仮説は、

特殊作動グループの機能を果たすサブグループのいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうである。第三の仮説は、特殊作動グループの機能を果たすサブグループのいないグループの方が、作動グループ機能が低くなるであろうということである。

本研究では、以上の研究の結果や方法に基づいており、その仮説は以下の通りである。

本研究の仮説

本研究の主な仮説は、特殊作動グループ機能を果たすサブグループ（本研究の場合はサクラ）のいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうということである。

この仮説を検証するために、以下の方法を用いた。

方 法

前述した仮説を検証するために、以下の方法を用いた。

(1) 被験者

心理学の講義を受講している学部学生から、実験に参加できる学生をランダムに抽出した122名（男=68、女=54）を被験者とした。

この被験者を1グループ6人の計25グループで構成し、その内の14グループ（男=8、女=6）は1グループにつきサクラ2人を入れた実験群である。そしてサクラは、二つの特殊作動グループの役割（闘争／逃避と依存）をそれぞれ担当するグループに分け、実験群を構成した。また、サクラには前もってそれぞれが果たす役割を書いたマニュアルを渡し、当日までに完璧に憶えてくるように指示を与えた。

グループは同姓ばかりで構成し、顔見知りでないことを原則とした。

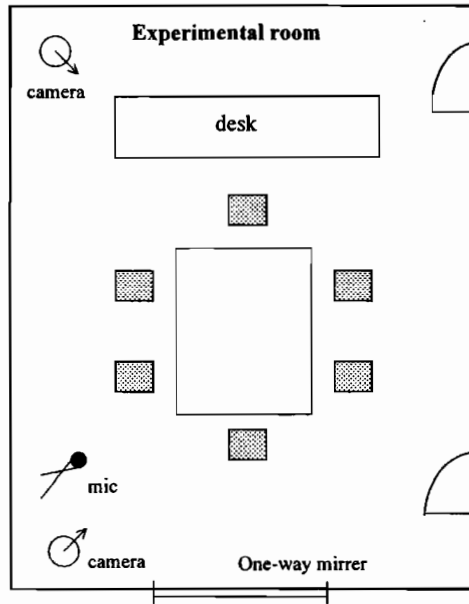


Figure 1 The Design of the Experimental Room

(2) 実験室のデザイン

本実験は、奈良大学社会学部研究棟内にて実施された。実験室の様子は、録画用ビデオカメラとビデオカメラの音を強化するための集音機、マジックミラーによって隣室の実験管理室の実験者に判るようになっている。

実験室内には、質問紙と時計を置いた机、中央に作業を行う机と人数分の椅子6脚、そして各椅子の後ろにはA～Fまでの紙が貼られていた。また、机の上には作業を行うのに必要な鉛筆、消しゴム、マジック、定規、パンフレットが置かれていた (Figure 1 参照)。

被験者に対する指示は、事前に録音したテープを隣室から放送した。これは、事前に録音されたテープを使用することで、実験者と被験者との接触を少なくする事、そして実験者効果が生じにくくする事を目的としている。

(3) 実験の手続き

以下は実験の流れを示すものである。



Figure 2 実験の流れ

a) 実験入室前の指示

事前の連絡で知らされた被験者 6 名又は被験者四名とサクラ 2 名を社会学部研究棟三階エレベーター前に集合させた。出席確認後、被験者は A ~ F の名札が渡された。この時、A の名札を渡された人をリーダーとした。

実験者は、被験者を誘導して一番手前の扉から入るように指示した。

b) 実験室入室

被験者達が実験室に入室し着席したことを確認してから、放送があるまで指定された椅子に着席して待つように伝え、実験者は実験室から退室した。

c) 自己紹介

課題が、被験者が一つのグループとして作業するように設定されていたので、まず自己紹介を導入した。これは、グループで共同作業をするためお互いのことを知っていた方が良いと考えたからである。この時、Aさんがリーダーとなって自己紹介を進めて下さいと指示した。時間は2分間与えられた。

d) 課題の説明

本実験の課題は、奈良大学の案内図を作成させることであった。そして、作動グループとしての意識を持たせるために時間制限を設け、50分間で完成させることを伝えた。そして、机にあるものを自由に使ってオリジナルなものを作るよう指示した。

e) 課題の実行

実験群の方が作動グループになるかどうかを測るために、サクラには前もって渡してあったマニュアルを完璧に行ってもらった。

そして、課題終了時間の20分前から5分刻みに残り時間を放送で伝えた。これは、グループが決められた時間内に課題を終えなければならないという意識を高めるためである。

f) 質問紙

課題終了後に二種類の質問紙に記入させた。一つは、作動グループの側面(Q1,2,3,4,6,7,8,9,12,13,14,15,16,17)と基底的想定 of 側面を測るものであり、もう一つはグループメンバーがお互いをどう評価していたかを測るものである。前者では基底的想定を測るために、Fight (Q22,23,48,49,50,52,53,55,67)、

Flight (Q21, 45, 54, 56, 57, 58, 59, 62, 63, 66)、

Dependency (Q19, 20, 27, 28, 30, 33, 35,)、

Pairing (Q26, 31, 36, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 46,)

の四つの尺度を用い、これを一つの質問紙として同時に行った。そして、各々5段階で評定させた。

また、質問紙記入においても時間制限を設け、10分間で行うことを伝えた。

g) ディブリーフィング

質問紙が終了と同時に、実験者一人が実験室に入室し、被験者達に感謝の意を述べた。それから被験者達に他の学生に実験のことを口外しないように強く要請した。これは、実験内容を知った被験者達が実験を受けることによって今後の実験内容が変わることを避けるためである。

結 果

今回は本研究の主な仮説である、特殊作動グループ機能を果たすサブグループ（本研究の場合はサクラ）のいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうという仮説を検証するためであるので、グループメンバーがお互いをどう評価していたかを測る質問紙においては、今回は分析を行わないことにする。

まず、質問紙における作動グループ項目の信頼性を調べるためにCronbach alphaを求めた。その結果、 $\alpha = .95$ であったため妥当性が再確認された。

次に、作動グループの構造を明らかにするために、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、Table 1に示されるように五つの因子が抽出された。

Table 1 作動グループ尺度の因子分析の結果

因 子 内 容	因子負荷量
Factor 1：時間に対する意識	
なるべく時間を守るようにした。	.892
時間がもっとあれば良いなと思った。	.887
時間が気になった。	.886
Factor 2：生産物の評価意識	
機会があれば今日出来たものより良いものを作りたい。	.864
完成したものに対する評価が気になった。	.776
なるべく満足いくものを作ろうとした。	.520
Factor 3：作業に対する意識	
作業がまとまるように努めた。	.785
作業が円滑に進むように努めた。	.782
作業が順調に進むように努めた。	.776
Factor 4：グループに対する意識	
グループがまとまるように努めた。	.860
グループメンバーとなるべく上手くいくように努めた。	.843
Factor 5：作業に対する自己評価	
完成したものに納得できた。	.596
道具をちゃんと使ってできた。	.564
パンフレットを使ってやった。	.553

Table 1において示されるように、第一因子グループは三項目からなり、この因子は「時間に対する意識」と解釈できる。第二因子グループも三項目にまとめられ、この因子は「生産物の評価意識」として解釈できる。第三因子グループにおいてもまた、三項目からなり、この因子は「作業に対する意識」と解釈できる。第四因子グループは二項目からなり、この因子は「グループに対する意識」として解釈できる。第五因子グループにおいては、三項目からなり、「作業に対する自己評価」として解釈できる。

続いて、基底的想定尺度を依存、闘争、逃避、つがいの四つそれぞれに分けて因子分析を行うため、それぞれの尺度の信頼性を調べた。その結果、依存尺度では $\alpha = .88$ 、闘争尺度は $\alpha = .96$ 、逃避尺度は $\alpha = .97$ 、つがい尺度は $\alpha = .94$ であったため、信頼性が再確認された。そして、それぞれの因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。

Table 2 依存尺度の因子分析の結果

因 子 内 容	因子負荷量
Factor 1：他のメンバーへの依存	
今回の実験では、他のメンバーに対して依存的であった。	.930
他のメンバーの指示（提案）に従う傾向があった。	.930
Factor 2：特定のメンバーへの依存	
今回の実験では、特定の人に対して依存的であった。	.932
特定の人への指示（提案）に従う傾向があった。	.927
Factor 3：グループの文化への依存	
実験の中のグループの支配的な雰囲気に乗った。	.946
グループによって設定された方針に沿って進む傾向があった。	.924
Factor 4：責任能力の無さ	
今回の実験で、グループ活動のための計画は自分以外の誰かの責任であることと感じていた。	.819

Table 2で示されるように、依存尺度では四つの因子が抽出され、二項目からなる第一因子グループは「他のメンバーへの依存」として解釈できる。そして、第二因子グループは二項目からなり、この因子は「特定のメンバーへの依存」と解釈できる。二項目からなる第三因子グループは「グループの文化への依存」として解釈できる。第四因子グループにおいては一項目であり、この因子は「責任能力のなさ」として解釈した。

Table 3 闘争尺度の因子分析の結果

因 子 内 容	因子負荷量
Factor 1: 表現的闘争	
他のメンバーに対して批判的だった。	.919
グループのメンバーに対する苛立ちを表に表出することがあった。	.916
他のメンバーに対して攻撃をうまく表した。	.910
イライラすると、皮肉っぽくなることがあった。	.907
グループの中で自分の意見をよく言えたと思う。	.860
批判的な感情を衝動的に表すことがあった。	.856
Factor 2: 今・ここに於ける闘争	
今回の実験では、特定の人に対して腹が立った。	.956
今回の実験は、欲求不満であった。	.826
Factor 3: 反応的闘争	
攻撃に対して反撃で応じる傾向があった。	.736

Table 3に示されているように、闘争尺度では三つの因子が抽出された。第一因子グループは六項目からなり、この因子は「表現的闘争」として解釈できる。二項目からなる第二因子グループは「今・ここに於ける闘争」として解釈できる。第三因子グループは一項目からなり、この因子は「反応的闘争」として解釈した。

Table 4 逃避尺度の因子分析の結果

因 子 内 容	因子負荷量
Factor 1: 作業からの逃避	
作業に引き込まれるのを避けようとした。	.877
グループを目的から脱線させる傾向があった。	.871
作業を長引かせたり、強化したりしたことがあった。	.869
Factor 2: やる気の喪失	
グループの中の対人関係はあまりに堅苦しすぎると感じた。	.864
今回の実験は退屈であった。	.861
実験に来るのは気が進まなかった。	.805
Factor 3: 闘争の拒否	
批判的な意見を出すことはあまり好きではなかった。	.822
グループの中で批判的な感情を表に出されると不愉快だった。	.802
相手の悪い感情を真剣に取らないようにした。	.763
本音を見せないように努めた。	.599

Table 4から、逃避尺度においては三つの因子が抽出された。第一因子グループは三項目からなり、この因子は「作業からの逃避」として解釈できる。そして第二因子グループでは三項目からなり、この因子は「やる気の喪失」と解釈できる。四項目からなる第三因子グループは、「闘争の拒否」として解釈できる。

Table 5 つがい尺度の因子分析の結果

因 子 内 容	因子負荷量
Factor 1：つがいの活動	
特定の人と関係が良いことを示そうとした。	.924
特に親しみを感じたメンバーがいた。	.904
グループの特定のメンバーと親しくしようとした。	.896
グループの中の誰かに個人的なコメントをしようとした。	.815
特定の1人か2人のメンバーとの個人的なやりとりを楽しんだ。	.732
Factor 2：小グループの相互作用	
グループの話を個人的なレベルでしようとしていた。	.936
自分の意見をメンバーの中の、特定の人に報告する傾向があった。	.925
グループに個人的な問題を持ち込む傾向があった。	.915
Factor 3：つがいの希望	
どちらかと言えば、2、3人のグループが良かった。	.762
小さなグループの一員になりたかった。	.722
Factor 4：グループの分裂	
今回の実験では、グループ全体よりも、特定のメンバーだけが活発的だった。	.697

Table 5で示されているように、つがい尺度は四つの因子が抽出された。第一因子グループは五項目からなり、この因子は「つがいの活動」として解釈できる。第二因子グループは三項目からなり、この因子は「小グループの相互作用」として解釈できる。二項目からなる第三因子グループは「つがいの希望」として解釈できる。第四因子グループは一項目からなり、この因子は「グループの分裂」と解釈した。

次に行われた分析は、Table 1に示された五つの因子を実験群と統制群で比較するために、t-検定を行った。その結果はTable 6に示されている通りである。

Table 6 作動グループ尺度の因子別、統制群と実験群の比較
(t-検定の結果)

作 動 グ ル ー プ 尺 度 の 因 子	統 制 群	実 験 群
Factor 1: 時間に対する意識	4.29 (.70)	2.16* (.76)
Factor 2: 生産物の評価意識	3.66 (.84)	2.13* (.49)
Factor 3: 作業に対する意識	3.63 (.68)	2.25* (.64)
Factor 4: グループに対する意識	3.64 (.92)	2.2* (.64)
Factor 5: 作業に対する自己評価	4.01 (.63)	1.88* (.52)

Note : 数値は平均 (上段) と標準偏差 (下段) を表す
*p < .000

Table 6に示されているように、第一因子グループの「時間に対する意識」において、有意な差があった ($t(148)=17.6; p < .000$)。第二因子グループの「生産物の評価意識」においても有意な差があった ($t(148)=13.9; p < .000$)。第三因子グループである「作業に対する意識」においても、有意な差があった ($t(148)=12.7; p < .000$)。そして第四因子グループである「グループに対する意識」においても有意な差があった ($t(148)=11.4; p < .000$)。最後に第五因子グループである「作業に対する自己評価」においても有意な差があった ($t(148)=22.7; p < .000$)。

考 察

本研究においては、仮説と最も関係している Table 1と Table 6を参照し、その他の Table 2から Table 5については今回の主旨とは外れるため、次回の研究で生かしていこうと思う。

本研究の仮説である、特殊作動グループ機能を果たすサブグループのいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうという仮説は、Table 6に示されているように、時間に対する意識、生産物の評価意識、作業に対する意識、グループに対する意識、作業に対する自己評価の五つの因子全てにおいて検証された。すなわち、特殊作動グループがいることである程度の基底的想定を担当してくれるため、グループメンバーは作動グループとして機能できるということが明らかとなった。これは特殊作動グループが、作動グループと基底的想定グループとの媒介をしているとも考えられる。何故なら、作動グループになるのも基底的想定グループになるのも、特殊作動グループの如何によって変わるからである。

そして今後の研究課題としては、Table 2～Table 5を用いて統制群と実験群ではどうか、そしてグループメンバーがお互いをどう評価しているかの質問紙からの検討を進めていきたいと思う。さらにはビデオ、案内図からの客観的な評価も分析していき、特殊作動グループ機能というものが

社会に於いてどういう役割を果たすのか、そしてそれをどう生かしていきけるのかを考えていきたい。

〈付記〉

本稿を執筆するに当たり、貴重なご意見、御指導を賜りました、奈良大学社会学部 Mohamed HAFSI 助教授に心から感謝申し上げます。

参考文献

- Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups and other papers*. NewYork: Basic Books. :
 (池田数好/訳(1973)「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)
- Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups*.: (対馬忠/訳著(1973)
 「グループ・アプローチ」サイマル出版会)
- Grinberg, L., Sor, D., Tabak de Bianshedi, E., 1977. *Introduction to work of Bion*. trans.
 A. Hahu. Scotland: Clunie press.
 高橋 哲郎/訳(1982)「ビオン入門」岩崎学術出版社
- Hafsi, M., 1999. Beyond Group Inhibition and Irrationality: Bion's Contribution to
 the Understanding of the Group: *奈良大学大学院研究年報 第4号 67-108*.
- Hafsi, M., 2000. RGST 日本版の作成とその妥当性～ Bion による「誘意性」の測定試
 み～: *日本心理臨床学会第19回大会研究発表*
- 井上 操., 2000. グループにおける「特殊作動グループ」の役割と効果に関する実験的
 研究: *奈良大学大学院研究年報第6号 p. 67-79*
- R. ブラウン/著 黒川正流、橋口捷久、坂田桐子/訳 (1993)「グループ・プロセス」北
 大路書房